

「文字・言葉・物語」 スピーカー：葛西薫

(2007年12月21日 東京ミッドタウン・デザインハブにて収録)

こんばんは、葛西です。このセミナーの依頼をいただいた時、嬉しかったですね。嬉しかったというのは、僕にとって文字について話すことぐらい楽しいことはないからです。逆に好きな分だけ文字のことをしゃべり出すと収拾がつかなくなってしまうので、あれやこれやを話してみて、何かの役に立ってもらえればいいなと思っています。

なぜ「文字・言葉・物語」というタイトルにしたかといいますと、文字というのはひとつの形ですが、文字が2つ以上つながって言葉になり、言葉がつながって文章ができる。文章がつながって物語ができていくと考えると、文字は基本中の基本、一つの部品にすぎません。部品という言葉が示すように、僕はどちらかといえば理工系のことに興味が深く、物語や文学といったことが苦手な人間でした。たまたま文字が好きだったということから仕事を通じて、サン・アドという会社に入ってコピーライターと組んだり、小説の装丁をすることで、言葉を仕事にしている人につきあっていくうちに文学的なものに気持ちが動いていくことになったわけです。さらに昔は自分が作るとは考えもしなかったテレビコマーシャルを結果的には作ったりと、自分の仕事の流れ、大げさにいうと人生の流れが、文字、言葉、物語の順序のとおりに沿ってきたのかもしれない、そう思うとすごく幸せなことだと感じています。

何歳だったか覚えていませんが、自分の名前が「葛西薫」で頭文字がアルファベットにしたら「KK」だということを知った時に、すごく嬉しくて、何でもかんでも自分の持ち物にKKと書いていました。そのうちに二つの文字を点対称で、さかさまに組み合わせてみるとマークのようなものができたんです。これはいわゆるプロになってから作った自分のためのデザインですが、こういうようなものを手を書いて楽しんでいたというのが、自分にとってのデザインに対するスタートだったのかもしれないと思います。子供の頃、自宅には、新日鉄の室蘭工場に勤めている親や兄弟たちがいたこともあって、いろんな機械の本がありました。開くと、何が何だか分からないのだけれども、魅力的だなと思ったんです。歯車の仕組みや絵柄など機械的な感じのよく分からないものに対してワクワクしていました。それと似たような理由で、例えば夏休みか冬休みが終わった時に学校でもらった通知箋の「箋」という字。変な字だなと気になってくるわけです。グリーンと近づいてみると、どう読むのかということを忘れて、黒と白の関係だとか、点の位置が収まりのいいところにあるんだなとか、いろんなことが頭の中でうごめきます。もう字じゃなくて、僕にとっては単なる機械部品のようなビスやナットみたいなものに見えてくるんですね。それらが微妙に組合わさっているコントラストに見惚れていました。

高校生になった時、文字の勉強をしようと思って通信教育をやりました。僕は文



通知箋



字について学ぶ以前は、漢字は正方形の中にぴっちりと言線的に書けばそれがデザイン的な文字になるだろうと思い込んでいたんですね。でも勉強していく中で文字のルールは何かと考えると、文字の余白の部分を平均化することじゃないかなと思いあたりました。言い方を変えると、文字を俯瞰して見て、線の黒いところに塀が建っていると考えて、虫のように小さくなった自分がその塀のどの場所にも、比較的気分が同じであればいいんじゃないかなと。例えば、余白のすくない窮屈な空間にいと逃げ出したくなりますね。そんな風に想像を働かせていくと、大体その想像はあたっていて、どんな文字を書く場合にもあてはまることに気がつきました。そうすると知らない文字や日本にない漢字を作ろうとしても、字が書けるようになったんです。僕なりに文字の秘密を見つけた気がしてすごく嬉しくなりましたし、一種の事件でもありました。

日本語の場合に漢字はまだシステマティックですが、ひらがな、カタカナというのがなかなかセ者です。

この「氷ノ国ノ人」というポスターを作った時のことです。サントリーが『樹氷』という名前の商品を発売して、マイルドウォッカから北欧を連想してフィンランドでノルウェーのモデルを撮影することになりました。ロケが嬉しかった反面、予算をかけて行くからにはフィンランドの何か証拠をとって帰ってこなければ、と緊張してフィンランドに行ったら、ほんとうに雪と木しかない。僕は風景ばかり撮ることを頭に浮かべていたのですが、その時にクリエイティブディレクターの仲畑貴志さんが「いいんだよ。モデルの顔のアップを撮って帰ってくれば、それでいいんだよ」という言い方で僕を慰めてくれたんですね。そのいいかげんにきこえた言葉に助けられて「アップを撮ってみよう」とカメラマンの富永民生さんと一緒に零下 20℃の凍った湖の上で撮影をしたんです。帰ってきて、写真を見てびっくりしました。ただのアップと思っていたら、顔に風景を感じる。たしかに仲畑さんの言ったとおり、モデルのアップの中に、キツネがそこに1匹いるような冷たい空気や異国の情緒が感じられるわけです。そこに中村禎君が考えたコピーが「氷の国の人」だったのですが、その時のコピーは「の」が平仮名だったんですね。活字で組んでこのポスターの上に置いても、今一つだと思っていたうちに、外国の言葉を日本語に表す時はカタカナだから「ノ」に直してやってみたら、すごくスパッとしたシャープなラインが出てくる。真ん中の「国」だけが四角くて、ほかは尖っている刀みたいな字ばかりですね。それがすごく冷たさを印象づけている。天地対称といいますか「国」という四角い字を中心に字ヅラとしてなかなかよくできているなと思ったんですね。文字でも平仮名とカタカナとではこんなに違うんだなと実感した仕事です。

平仮名というのがまた困ったもので、自分で一生懸命手を動かして書いていると、漢字のルールと全く違うことに気づきます。筆の抑揚とか、スピード感が文字に色濃く残っているのは、平仮名という書体だけなんですね。平仮名を書く時は紙を回さなければダメです。紙を固定しておいて平仮名を全部書こうと思うと、自分の体を動かさなきゃいけない。それを避けるためには紙を回しながら、自分が書きやすいカーブを書くわけです。気持ちのいいカーブは、たとえばニンニクな

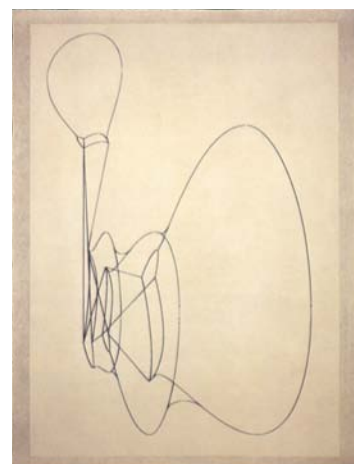


んか見ていても感じます。手に持って転がしてみると非常に色っぽくて気持ちがいい。平仮名の「ふ」を見ると、ニンニクを思い出したり、ニンニクを見たら平仮名を思い出したり、カーブの仕組みには興味つきません。

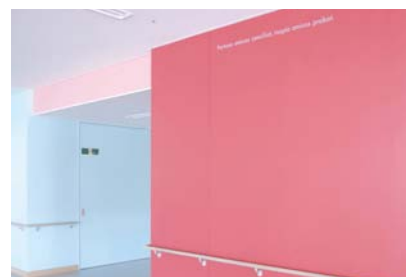
15年前にギンザ・グラフィック・ギャラリーで展覧会をやりませんかと言われたとき、初めてのオリジナルの展覧会ということもあって、怖いものだから白い紙に何か書かなきゃいけないと思って毎日書いていたんですよ。そうしたら、いくら書いてもカーブを書いてしまう自分がいて、じゃあそのカーブに徹底的に付き合ってみようかなと数カ月やっているうちに、こんな形に行き着きました。これは何て説明したらいいかわからない、僕にとっては快感のある形です。この形を見たとき、自分は空気みたいなものを書こうとしているのかなと思いました。線を使っているのですが、空気を孕むとか浮かぶといったイメージです。展覧会のタイトルは「空気」という意味で『エアロ』というタイトルをつけました。自分としては文字の平仮名のカーブを一生懸命書いて覚えたことが、ここにつながっているんじゃないかなと思ったりします。

中学生の時の美術の先生が、美しい曲線とは何かということについて話したんですね。ただ、曲がってればいいというものじゃなくて、曲線の内側にある制御された骨の存在が感じられるようなカーブが、いわゆる美しいカーブなんだと。それをオーガニック曲線というんだというようなことを言ったことが忘れられません。それで一番思い出すのは、中学生の時に鉄道模型をやっていて、直線の線路とカーブの線路をガチッと結んで、そこを電車でスピードを上げると、直線から曲線になった瞬間に必ず脱線するんですよ。それを解消するためには、直線から曲線にいく間にもう一つの「そろそろ曲がるぞ」というヒントのようなカーブがあってから、本当のカーブに向かえば電車は脱線しない。それとすごく似ている気がします。

言葉を大切にするという話ですが、新設された東京都立つばさ総合高等学校の空間デザインをしたときのことです。石原都知事が新しい試みとして羽田高校という普通高と羽田工業高校の二つの高校を合併し、校長先生に民間の人を招聘してゼミナール方式の教室を持たない高校を作ろうというふうに考えたんです。山下建設が全て真っ白な4階建ての建物を作って、各200メートルぐらいの廊下の壁面を何らかのアートにしたいと漠然と思っていた。安東孝一さんという空間プロデューサーに相談したところ、こういうものは、作品にしてしまうアーティストよりは、機能するような空間を目指すデザイナーのほうが良いと思うと。ついては、葛西というデザイナーが良いと思うということを書いてくださったわけです。話がきたときこんな広い空間をどうしたものかと思ったのですが、僕が高校生だったときのことを考えているうちに、一番思い出したのは校長先生の訓示です。朝礼とか何か挨拶があったら、必ず最後に「継続は力なり。君たち、続けなきゃダメだぞ」とよく言われていたんですね。もういつも同じでうんざりしていたのですが結局その言葉はよく覚えている。卒業していい歳になってくると、たしかに「継続は力なり」だなと噛み締めるわけです。そんなわけでことわざで何かできないかなと思って、サン・アドのコピーライターと相談をしながら、ラテン語



のいいことわざを調べ尽くして、壁のあちこちに言語のまま並べて壁は色壁にするという提案にしたんです。例えばこれは「フェスティーナ・レンテ」という言葉で、「ゆっくり急げ」という意味です。生徒手帳や図書館に色と文字の一覧表があって、そこにことわざの由来とか意味とか解説も入っています。自分の教室がないですから、例えば「フェスティーナ・レンテ」の前で皆待ち合わせしようと言えば、もしかしたら色も記号になるかもしれないし、ことわざも自分たちの合言葉になるかもしれないという目算もあったんですね。ほかにも好きなことわざがあって、一つは「順境は友を与え、逆境は友を試す」。高校生の時代には分からなくても、僕くらいの年齢になると、友達とは何かということを考えることになると思うんですね。卒業生たちがそれぞれいい歳になってからことわざの真の意味を知り、高校時代を思い出してくれればいい。僕の一番好きなのは「全て物事のはじまりは小さい」ということわざです。



言葉と絵との関係でいうと、サントリーウーロン茶の広告があります。この設定は、母子が公園にピクニックに行って、あんまり気持ちがいいからお母さんがウトウト昼寝してしまい、娘が遊びに疲れて帰ってきて「お母さん、ウーロン茶が入ったよ」というものです。それをグラフィックで展開する時に、右だとせっかくだいい気持ちなのに耳で「ウーロン茶ですよ」と大声で叫ばれちゃ、かなわないですね。小声で「ウーロン茶ですよ」と言うと、起こしちゃいけないけれど起きてほしいという気持ちが出てくる。そういうことを想像すると、自然に左のレイアウトになっていくわけです。「ウーロン茶ですよ」という言葉が生きるか死ぬかというのは、言葉の周りにも責任がある。広告の仕事をしていると、もっと商品を大きくとか言われると思うのですが、それは大間違いで、みんなが大声で言っている時には誰の声も聞こえなくなる。広告を見る人の身になってみればとか、お母さんや子供の気持ちになってみればと思うと、自ずと位置が決まってくるんですね。

ウーロン茶ですよ



これは最近やった「中性脂肪に告ぐ」という仕事です。これは特保という実際医薬効果のある黒烏龍茶で、毎食飲めば、脂肪が分解されるというものです。そこで思ったのは、薬屋の前によく「多汗症でお悩みの方に」とか人に言えないような悩みの時に、筆で書いて貼り出しますよね。その個人的な悩みというものは筆文字が似合うなと思ったんですね。こっちのほうが説得力があると。若者向けのウーロン茶も、あえて古風な平安時代風な万葉の時代の女文字にして、久しく達筆とか手紙ということから離れている時代にこういう世界観っていいものだろうということを伝えたくて決めました。



最後にユニテッドアローズの広告です。ある人の紹介でジャンルイジ・トッカフォンドというアーティストの絵を見た時に、色はきれいだし、やっていることはナンセンスなんだけれども、明るいということの裏に寂しいとか悲しいとか、いろんなプラスとマイナスが同居している感じがしてものすごくいいなと思ったんです。幸い、このユニテッドアローズの仕事がきた時に、トッカフォンドの絵を思い出して。もしも僕がトッカフォンドだったらどんなコマーシャルを作ろうと考えて、依頼する前にどんな絵がいいかなと思って、トッカフォンドの

気持ちになって自分で絵を描いてみました。例えばユニテッドアローズに行ってサラリーマンがネクタイを買ったら嬉しくて、ネクタイを縛っているうちにそれがプロペラになって空を飛んでしまうラフを書いたり。僕は一体何をしようとしているのかということをクライアントに説明しなきゃいけないので、ユニテッドアローズはつまり何をお客さんに提供するかというと、ウキウキした気持ちを提供するというではないかなと。難しいことは一切言わずに、これだけをクライアントに提案をして、「ついてはこういう画家がいますから、一緒にやりたい」ということを言って、ゴーサインが出ました。

えてして提案というのは非常に簡単な言葉でないと通じないんじゃないかなと思います。あの手、この手を使うよりは、シンプルな言葉がクライアントにも通じるし、トッカフォンドにも説明しやすい。音楽を作る時もこれがキーワードになって作ったりするわけです。

「わたしのなかのわたし」というシリーズからはものを作っている靴職人とか、服を作っている人とか、その作っている人とそれを楽しむ人という範囲まで広げようと展開しました。トッカフォンドがアニメーションを作る時は1枚1枚のコマをB4ぐらいの紙に筆で描くものですからとても時間がかかる。ところが開店が迫っていて時間がないという理由もあって、僕の手元にあったトッカフォンドのグラフィックのための絵を使いながら僕が編集することになりました。日本語をよく知らない外人が歌っているというコンセプトで、歌詞がずっと流れていくという言ってみればカラオケのアイデアです。で、僕はアニメーションだと思い込みで、僕なりに勝手に一枚の絵をいじってしまったんですね。ウインクをすとか、口がピクッと動くとか。どうかなと思いながらおそろおそろトッカフォンドのところへ試作を送ったら、「下品だ」と言われました。「葛西さん、悪いけど下品だという言葉が一番正しく当てはまる日本語なんです。本当の意味でのアニメーターじゃないグラフィックデザイナーがなぜそんなことをするんですか」と日本人のマネージャーがいうんです。そのトッカフォンドの言葉が大ショックで、もう大反省して、やっぱりそうだったのかと思いました。何とかしなきゃと思っているうちに、そう僕には文字がある、カラオケの歌詞をガンガン大きく流せば、一つのスタイルになるじゃないかというふうに思った瞬間に目の前が開けてきて、あとは出来合いの絵を背景にどんどん歌詞を流せばいいと気がついて編集しなおしました。開店日にユニテッドアローズが招待して来日したトッカフォンドに、出来上がりを見せることになり、その時は「とてもいい」というふうに言われて、「僕はもうトッカフォンドとは会えないかもしれないと思ったんだよ」という話をして、結局笑い話で終わりました。

よく考えると、彼は僕の顔を見抜いて、「お前が一番得意なことをやれ」と言ってくれたおかげで文字のことを思い出して、タイポグラフィから発想したものが出来上がったわけです。だからトッカフォンドにすごく助けられたなと思います。

ということで時間になりました。お話したように、そのぐらい僕は文字については好きだというだけで、本当の意味でのプロフェッショナルな知識があるわけでもないのですが、文字をめぐるこんな楽しいことが起こるんだなということをお伝えして話を終わりたいと思います。



わたしのなかの わたし

